

伝統染

織新紀行

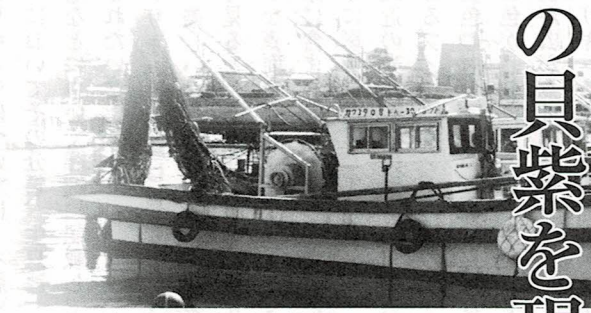
17

古代染色のロマンを奏でる“海の紫”



縄文人も染めていたのか大森貝塚遺跡

幻の貝紫を現代の染織に生かす紫工房



城下町の漁港の底曳網漁船

日本最大の組紐産地 上野市にある貝紫染め工房

稲岡良彦さんの営む貝紫染め紫工房は、伊賀盆地の城下町、三重県上野市にある。俳聖松尾芭蕉の生誕の地としても知られ、緑の豊かな木立の地形のなかに芭蕉翁記念館・俳聖堂・芭蕉翁生家・芭蕉翁故郷塚がある。また、この地は甲賀流と競った伊賀流忍者の里、忍者屋敷もある。さらに柳生流の武芸者荒木又右衛門が助太刀をした日本三大仇討の一つ「鍵屋の辻」跡は、現在、鍵屋の辻公園になり、傍には当

時の様子を物語る伊賀越資料館がある。

毎年約五〇万人の観光客が訪れる上野市は、和装の帯締め・装束ほかインテリアにいたる伝統工芸の組紐類では、国内最大の産地でもある。四七軒の組紐製造業者が加入する三重県組紐協同組合の、伊賀組紐センターでは、高麗織とも呼ばれる組紐資料と作品展示、実演を公開している。そして、組紐業界の糸染めを引き受ける五軒の染色業者のなかに、稲岡さんの工房も名を連ねる。

海から遠く隔つ伊賀の地で組紐の糸染めを専門にしていた稲岡さんが、動物染料の貝紫に魅せられ、自身のライフワークにすべく、その染色に打込む心境の軌跡を、ここで辿ってみることにしよう。

出自は昭和三十一年上野市。今年で四六歳、糸染めに係って約二六年、独立開業して一年目に当る。昭和五十一年に熊野工業高等専門学校の機械工学科を卒業。実家は米穀商だが、父や親戚筋で器械組紐の製品を主とする糸伍株社長のすすめで、京都市内の糸商のつ

富山弘基

てを頼り、西陣織物産地の糸染め染工場へ二カ年の見習い修行に入った。

この時期、伊賀組紐産地には大小のメーカー約一〇〇軒が、各々に盛況を呈していた。糸伍株では仕事現場の声が直ぐに伝わるお抱えの染色室を、自社内に設けたいとの考えから、気心の知れた誠実な稲岡良彦さんに白羽の矢を立て、西陣へ修業に送り出したという経緯がある。稲岡さんにとっては思ってもかかない展開から、染色の世界に身を置くことになった。

多くの人たちの期待を担っての見習い修業は、持ち前の気質が幸いした。機械工学から転身したという意識の戸惑いもなく、若いエネルギーを燃焼させながら、それこそ与えられた責務を果たすべく一心不乱の日が続いた。昼間は糸染め現場で働き、夜は西陣の職業訓練校や京都市染織試験場の技能者養成研修に通い、染料と染色技術の理論を学んだ。短い二カ年の修業期間に、プロ並みの染色技術をマスターするなどは、余程の意志と強靱な体力が求められた。

<http://www2.ocn.ne.jp/~purple7/>

貝紫工房

伊賀上野
稲岡染色店
開業日時：Tue Nov 27 23:56:39 2001

あなたは、貝紫工房に訪れ、0015241 目の仕事をします 1999/12/25 Start...

吉野ヶ里遺跡から小さな布片が発掘されました。二千年の眠りを覚ました幻の古代染色「貝紫染め」の社大な背景やロマンに、私の興味は尽きません。

貝紫の染色技法について

- 直接法
- 還元染法
- 貝紫染をして
- 高級絹糸「小丸丸」の貝紫染

黒染め

- 伊賀忍法黒染め
- 檳榔子（びんろうじゆ）黒染め

サンプルが欲しい方、染色依頼、研修等は下記フォームまたはmasaki7@poplar.ocn.ne.jpまで

「これでは自信がもてない。途中でリタイアは許されない。」と、一カ年の延長を申し出た。修業は都合三カ年におよぶことになる。

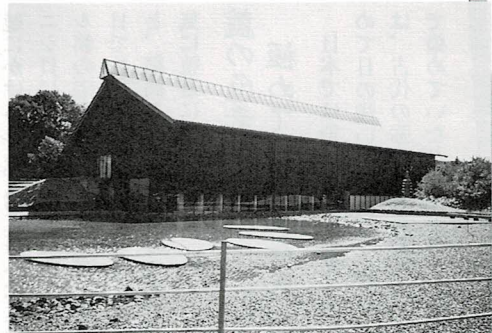
組紐の糸染めから

唯一の貝紫染め職人へ

染工場の現場は西陣織の絹糸に適った酸性染料を主に、各種の化学染料を駆使する仕事だが、化学染料と対極にある天然染料への好奇心も芽生え始めていた。染料の発色する「彩り」に、化学と天然の違いを感じたからのものである。貯めておいた小遣い程度の給金をはたいて、この頃すでに古書の稀覯本扱いになっていた「傳統の色」（吉岡常雄著）を、出入の染織書肆に依頼して一五万円で購入した。

同書の内容は植物染料を用いて染める手法の解説と、その染め見本裂を貼付してあったが、数ページにメキシコ貝紫の記述と僅かの貝紫糸を添えていた。天然染料の基礎知識を得るには、この書が役立つ。

修業明けの二三歳で糸伍株の染色部



志摩半島の鳥羽市にある海の博物館

の色としている。以来今日まで紫は、高貴な色であることにはささかの揺ぎもなく、これは洋の東西を問わず紫色は特別な権威の象徴とされてきた。その深遠な紫の彩りを、古代ローマ、エジプトなど地中海をとり巻く諸国では海の紫「貝紫」織物の衣服を王公貴族・司祭がまとう慣しが一五世紀後半頃まで続いたと云われる。

稲岡さんはなぜか「紫色」の虜になつていた。紫根染めにも手を染めてみたが、なぜか幻の紫と称される海の紫「貝紫」の染色に思いをつのらせた。

三五歳まで勤めた糸伍俵を辞し、市内の川沿いに工房を建て独立開業した。日常業務の化学染料による組紐糸染めの合間をぬって、年来の貝紫染めへの挑戦も次第に実践段階へ歩を進めていた。全国の染織家に貝紫染めの糸を提供できる日本で唯一の染め職人になりたい。目的は定まった。いよいよ行動を起す時がやってきた。それは六年前の平成九年に遡る。

貝紫色素の豊富な

アカニシ貝との出会い

貝紫染めへの第一歩は、まずパール腺を有するアクキガイ科の巻貝を入手すること。イボニシ、レイシガイの採れる最も手近かな岩磯と云えば、三重県下では志摩半島。ここでは昔から海に潜る海女達が、頭部に被る磯手拭に身の安全の魔除けの呪符として、イボニシの殻を砕いて取り出した貝紫色素を含むパール腺(パール腺)を直に手拭に擦りつけ、☆印などを描く風習がある。

幸運なことに学生時代の友人が志摩にいた。「イボニシがあれば貝紫を染

められるんや!」、友人に案内された磯の岩場でイボニシを採り、貝殻を割って小さな刃物を使いパール腺を取り出した瞬間、思わず「これがパール腺か!」と声をあげた稲岡さん。一日がかりでバケツ一杯にも満たない、押し寄せる波のしぶきのなか、岩場しがみついての危険な貝採りだった。

工房に急いで持ち帰り冷蔵庫の冷凍室に保管して、一〇〇〜二〇〇ケくらいに分けて金槌で貝殻を割り、小刀で肉質部からパール腺を剥離させ、ピセットを使って取り出す作業は、予想を越える労力を費した。

イボニシは小粒なために、パール腺は細く含有の色素も少ない。貝紫染めを体験する鳥羽市の海の博物館が催す実習にも参加したが、布に絵の具を塗るような直接法では、貝紫染めを縦横に生かすにはほど遠い。

見かねた友人はイボニシより粒の大きなレイシガイを漁師に頼んでくれた。これはパール腺も太いゾータバコの方法で絹糸が紫色に染まった。

その友人から思いがけない電話が掛つた。「鳥羽のジャスコでアカニシを売っている。買って殻を割ってみるとこれはパール腺が太いゾータバコのフィルター位ある。」多少おおげさにしても、持つべきは友である。我がことのように親身になつてくれた。それは三年前のことである。

アカニシを継続して入手できないものかと、上野市内で欧風料理店を営む知人に相談した。話は日をおかずして進展した。「四国で鮮魚店を開いている大学時代の先輩に聞いてみよう。」鮮魚店の先輩から朗報が返ってきた。アカニシの供給を約束するという返事

だった。ここでも人と人の絆が息づいていた。

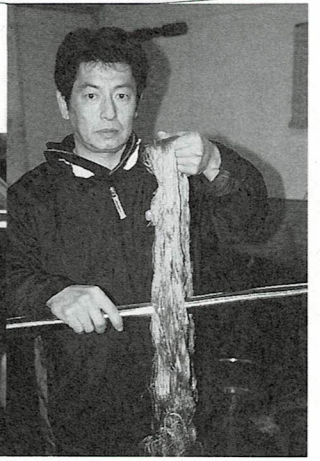
紹介された鮮魚店の所在地は、岡山県児島から瀬戸大橋を渡り、瀬戸内海に面した津々浦々の漁港のなかでも、古城の残る城下町。市内には魚市場があり、威勢のいいその鮮魚店には活魚を買いに来る人が後を絶たない。季節によって獲れる魚貝は異なるが、ヒラメ・タイ・アジ・イカ・トラフグ・アナゴ・タコ・アワビ・サザエなどが生け簀や店頭に並んでいる。アカニシは注文のある時に漁師に依頼するとのことだが、この刺身はコリコリと歯ごたえがあつて美味である。食用として料理店でも結構使っているが、調理の前にパール腺は除かれるので、その苦味と臭気を知る人はほとんどない。薬用ではアカニシ汁は腹痛の妙薬とされるし、寺社の縁日の店で売っているウミホツキ(ナギナタホツキ)は、アカニシが海底に産みつけた卵囊(卵)を塩蔵で保存しておいたものである。ここ城下町の漁港には底曳網と建網漁法の漁船数十艘が見られる。早朝出

貝紫染めの色素を持つアカニシ



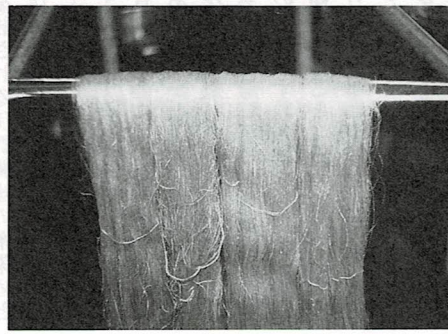
アカニシの貝殻を割りパール腺を取り出す道具





還元建ての染液で絹糸を染める稲岡良彦さん

美しい紫を発色する絹糸



賀県)の発掘品からの発見に、古代人の智慧の深さを知らされたが、明治一〇年(一八七七)、アメリカの動物学者E・S・モースが開通して間もない鉄道工事で露出した大森貝塚(東京都品川区)を発見、その調査報告書のなかでアケイガイ科のチリメンボラ(紫色素を含有する貝)などの貝殻の一部が砕かれていることから、紫色に用いられた可能性を指摘している。大森貝塚は縄文時代後・晩期の貝塚とされ、ことによれば縄文人も貝紫に着目していたのかと思わせる。

戦後、日本で貝紫を染料として利用する染色について論考が相次いで発表された。貝紫染料を採集するに最も適しているアカニシの紫色素は、古代フエニキア紫の主成分六・六ジプロロマインジゴと同じ化学構造を持つとされ、アカニシの紫色素による染色は、還元法による染色が染織作品の制作に適していることが明らかになった。

メキシコ・オハカ州の太平洋沿岸で行っている貝のパープル腺から指圧で色素を絞り出し、糸に擦りつけて染め、日光照射で発色させる直接法は、斑染めとなるため、日本の染織品には藍染めと同様の還元法による浸染が望ましい

藍の色素に

極めてよく似た貝紫色素

日本では染料として脚光を浴びはじめた日の浅いアカニシ(和名=赤螺)は、古代の弥生人も有明海のアカニシで染めていたという吉野ヶ里遺跡(佐

とされている。貝紫の色素と藍の色素とは、云わば親戚同様な近い関係にあり、木村光雄氏は「貝紫の化学」(月刊染織Q 昭和五八年一月号)で「貝紫の化学構造から二つのBr(臭素)を除くとインジゴで、つまり菜などの天然藍に含まれている色素成分と貝紫の色素成分とは極めてよく似た化学構造を持っている」と指摘、貝紫染めは藍染めの場合と同様な建て染め法によることができると述べている。

また、昭和三六年から天然染料の研究をすすめていた吉岡常雄氏は「天然色素の中で還元染料に属するのは藍と貝紫の二種に限られる」と『染色工業』一五号(昭和四二年二月)に記述している。

佐々木幸彌氏は「古代紫(貝紫)の化学的組成について」(『染料と薬品』昭和五〇年二月号・化成工業会)ほか本誌上でも還元法の建て方(表1)を記しているが、古代地中海沿岸の貝紫においては、当時藍建てに使っていたとみられる蜂蜜と醃酵人尿を助剤に、建て染めを行っていたのではないかと推察している。

さて、こうした化学構造が明らかになると、その染色の堅牢性に注目が移る。この点について佐々木氏は抜群に優れていることを実証している。自らの試験では、日光照射による発色後にソービングを行なった絹布の試験結果(JIS法)によると、洗濯による変退色及び汚染(L-084)は五級、カーボンアーク燈光試験(L-082)は八級以上の堅牢度と公表している。

やはり貝紫の色素は高貴な色を裏付けるように、彩りもその堅牢度もそれにふさわしいものであった。

染織作家が試みた

貝紫染めの染法

では現在の日本の貝紫染めは貝紫染め職人の稲岡良彦さんや、染織作家はどのような染法で作品の制作に取り組んだのだろうか。まず昭和五年、国内で初めて貝紫染め緋を織り上げた沖縄県石垣島のからん工房・深石隆司氏の場合は「サンゴ礁のリーフに棲息するアケイガイ科のムラサキイガイシ、アカイガレイシなどを採集して日陰で殻を砕き、パープル腺からピンセットで色素分を取り出し器に集める。極く少量のアルコールを加えて蛋白質の粘りをとり、少量の水で溶きほぐして目の細かな網で濾して色素分を採る。この原液は薄黄緑で、これに水を足して濃度を加減し染液をつくる。糸は常温の染液に浸してしぼり、陽光のもとで満遍なくさばいて発色定着させる。陽光(紫外線)に反応した色素は黄緑から青味を帯び、しばらくして美しい紫色に変化する。充分発色した糸はよく水洗して不純物を落とし、更に直射日光に当てて仕上げる。」としている。

宮崎県・綾の手袖工房の秋山真和氏は還元建て染法をとった。「貝の肉質部からパープル腺を取り出すと、蛋白質を酵素で分解して色素のみを分離、これを乾燥させると粒子状の貝紫染料になる。藍の建て染め還元溶解剤には一般にハイドロサルファイトとアルカリを助剤に使用するが、ここではアルカリ剤に樫の灰汁を使った。樫灰の一番灰汁に貝紫染料とハイドロサルファイトを加え、掻き混ぜて染料を溶かし、染色の原液をつくる。湯をはった染色

(1) 直接法
貝の鰓下腺液→糸・布に直接に擦り染め→日光照射(天日にさらす)→発色→水洗
(2) 還元法
貝の鰓下腺→数日間天日にさらし日光発色→温アルカリに溶解→還元剤(ハイドロサルファイトなど)を混入→ロイコ液→糸布を浸染→空気酸化→発色→ソービング

表・貝紫の染色技法



稲岡式で製造した顆粒状の貝紫染料

のできない貝紫染め。すべてが自身の手で編み出す染法に依るだけに、仕事に非常な精度が求められる。

これなら貝紫染めは大丈夫と、ひそかな自信が湧いてきた頃、インターネットに貝紫工房のホームページを開設した。平成一二年秋のことである。多くの人たちに解り易く「貝紫染めして気の付いたこと・還元染法について」などカラーの工程写真の画像を挿入して解説した。

槽に原液を注ぎ染液とする。後は建築染料の染色法とほぼ同様」としている。藍建てを貝紫染めに応用しているのが還元法で、糸を染色後に空気酸化すると赤紫に発色する。天日乾燥させて中性洗剤で煮沸ソーピングするとさらに紫色は鮮明になると云われる。

還元建ての利点は、色調をコントロールできることや、その染液を糸染めにとどまらず型染め・手描き染めの色挿しにも使用できる。染色作家の堀江勤之助氏は、小規模な器材で還元建て染液を作り、模様を描いた。また友禅作家の山岡古都氏はサンゴの版染めに貝紫を使った。

紫工房の貝紫染め

還元建て染法

再び紫工房・稲岡さんの貝紫染めに話を戻そう。貝紫染めの原料となるアカニシの安定供給が約束されたことで、染色法も実験を重ねた結果、藍建ての還元建てに似た手法をとった。しかし、染め職人は染織家から預る絹糸で斑なく所定の色に染め上げる使命がある。失敗があつてはならない。專業者の先例を学んで技術を修得すること

その一部を要約してみよう。「イボニシ、レイシ、アカニシの巻貝による貝紫染めを行ったが、イボニシよりレイシ、レイシよりアカニシと段々赤味が強い紫になった。還元には苛性ソーダあるいは、ソーダ灰、ハイドロサルファイトを使うため、染色終了後、六〇度の温湯に酢酸を入れソーピングを行った。貝紫のパープル腺（染料になる部分）の染料の構造には、インジゴブルー、インジゴブラウン、インジゴルピン等、多種の染料が混ざっていると思われるが、ソーピングを行うとインジゴブルー、インジゴブラウンが脱落して赤味を帯びた貝紫になり、堅牢度も上がる。

還元染法の手順は、金槌で貝殻を割り、周囲の肉質部と一緒に鰓下腺（パープル腺）を取り出す。これを器に集めてすりつぶし、直ちに直射日光の下で濃紫色になるまで酸化発色させる。完全に濃紫色になったものを原染料とする。染色は、原染料を温アルカリで溶解した液にハイドロサルファイトなどの還元剤を混入することにより、薄緑色のロイコ液（水溶性になった貝紫色素の染液）が得られる。その溶液に絹糸を繰り入れ、一定時間浸染するこ

貝紫の染色は一発で決める

拳形の巻貝アカニシの殻は厚くて堅い。漁港から宅急便で届いた生貝は、即座に必要な量を残し、余りは大型冷蔵庫で冷凍して保管する。染めの注文に見合う貝紫染料をつくるには、貝殻数百個を一ヶずつ金槌で割ってパープル腺を取り出す作業が数日続く。稲岡さんの作業を見かねた中学生の子息が手伝いはじめると「勘がよいのか私より上手にパープル腺のある辺りを、割ってくれる。」と稲岡さんは相手を崩す。

パープル腺を乳鉢に集めて丹念にすりつぶした後にアルカリと水を加え、煮沸して溶解させ、液を濾し器で精製し色素のみを分離する。これを日光の下で乾燥すると顆粒状の濃縮した染料となる。還元建ては、四〇度位の温湯にアルカリ剤を混ぜて顆粒状の染料を溶かすと、やがて藍の華に似た貝紫の華が咲き、勢いよく建ったことを知らせてくれる。これを原染液にして濃度加減は絹糸を試し染めながら染液を調整して、糸染めにとりかかる。

「薄紫は一発勝負で染めますが、濃色は斑なく重ね染めするのに苦心します。」と稲岡さんは染色の現場では、一寸の怠惰も許されないと自らを戒める。二〇坪余の工房には赤紫、ピンク、

青の彩りの貝紫絹糸が竿にかけて空気にさらされている。染織家から受注して約二週間の期限内で納めるまで、気の抜けない貝紫染めである。

パープル腺は虹色のように変化することも云われる。貝殻から取り出した当初は黄白色・淡黄色を呈しているが、その色素は太陽の光りや空気によって黄緑↓緑↓青↓赤紫へと変化して、美しい紫色に発色する。

ここで稲岡さんが考案したもう一つの染料づくりを紹介して、貝紫染めの稿を結びたい。

天候に左右されながらの染色だが、還元建てをした状態の染液に酸を混ぜると色素が沈澱する。上水を取って真水を足して沈澱させることを繰り返す。これは色素を含む塩分を取り除くためで、塩分が残留していると粘り気を生じる。さらに沈澱した色素を煮詰めて天日乾燥すると、さらさらした顆粒状の貝紫染料が誕生する。

これを冷凍保管で染織家からの受注に備えることになるが、天然染料は草木染めでもそうであるように、染めの処方箋通りにはいかないのが常である。そこに染め人の経験と感性と誠実から得た勘が加味されてくる。

動物染料による貝紫染めを自らの手でマスターした日本で唯一の専門職人・稲岡良彦さんは、いまいっその磨きをかけている。各地の染織作家の依頼をこなし、古代の幻の貝紫を現代の染織に甦らせる大望を抱きながら、染めの仕事に打ち込んでいる。

紫工房の所在地

〒518-0825三重県上野市小田町1373の22
TEL 05995(21) 9511
FAX 05995(21) 9511